

## アフリカの部族とアジアのむら

速水佑次郎（FASID 大学院プログラム顧問・政策研究大学院大学教授）

私はかつて東南アジアを中心に農村調査に携わった体験から、アジアにおける共同体についてはかなりの理解を持っている積りである。それと比べアフリカについての知識は皆無に近い。ただ何年か前にベルギー人のアフリカ専門家と協力して、アジアとアフリカの農業比較に関する論文を書かねばならなかったため、彼との議論を通じてアフリカの共同体の性格につき次のような仮説を持つようになった。

まずアジアの農村共同体は主として地縁で結ばれた「むら」であるのに対し、アフリカのそれは元来血縁に基く「部族」であるらしい。この差は人口に比し土地資源が豊富なアフリカが、土地を多用する焼畑や遊牧など移動型農業に依存してきたに対して、アジアでは古くから土地の稀少性が高く定着農業が発展してきたからであろう。両者とも共同体が相互扶助による保険機能を持つ点では同じである。だがアジアでは、豊かな村人が困窮した隣人に様々な形で所得移転をおこなうよう要求する社会規範は存在するものの、貧富の差を否定するわけではない。それに対し、アフリカでは高い所得を得た者に対し、その所得を共同体内で再分配し尽し、本人に余剰を残させないようにする圧力がかかるという。

このような規範がアフリカの共同体にあるとすれば、それは移動型農業に特徴的な高いリスクと成功と努力の間における低い相関関係に基くのではなかろうか。たとえば、遊牧集団の一人が彼の牛をライオンに殺され、他の一人の牛が難を逃れて無事に子牛を殖やしたとすれば、その差は運にすぎまい。とすれば後者が前者に所得を分け与えるのはフェアというものだろう。それに対し、アジア型の定着農業では、村人の間の所得差は、除草や施肥などに払った努力の差によるところ大なることは誰の目にも明らかであろう。働き者と怠け者の所得を平等化するのはフェアではない。むしろ働き者の資産（田畑とその作物）に対する所有権を保護し、彼の生産力を向上させた方が村人すべての生存維持にとって有利であろう。

このように人口に比して土地資源の稀少なアジアでは土地生産性を向上させる機能が共同体規範として形成されてきたのに対し、アフリカではその必要がなかったのであろう。近年の人口爆発とともに、アフリカの人口密度はアジア型へと接近しつつある。それに応じて土地生産性向上を支える方向に社会規範が変化するであろうか。それは「アフリカの緑の革命」を実現する上で一つの鍵であるかもしれない。